

## 「春秋日記」②（明治 24 年～27 年）

|        |                             |
|--------|-----------------------------|
| タイトル   | 「春秋日記」②（明治 24 年～27 年）       |
| 著者名    | 能海寛                         |
| 雑誌名    | 能海寛研究会機関誌『石峰』               |
| 号      | 第 16 号                      |
| ページ    | 48-64                       |
| 発行年    | 2011.3.15                   |
| E-mail | Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会) |



# 「春秋日記」第18巻

# 天頂山 石峯録

明治24年1月

1日 水のあわ草ばの霧のゆ免の世にゆ免さめ見ればあら玉の□□水のあり草ばの霧の夢の世にはやさ免ねれば年のあら玉。夢の世にゆめさめねれば年の春。□んのおもへば先年ふれまたたく間にむまれ来てもはやあとかさなりに教里それでこそ夢の世にや免ねれば年の春をしはもすこしなんきにならずばいけない、いけないは年々に年と心をあらた免とおもうとおりにならぬ世の中。朝、白山返る。本田、桑、予3人当宿にて雑煮を食す。爰に2ヶ年の新年を下宿に迎こと。郷里の新年に遇はさる爰に五春、19は広島、20、21は京都に於いて越ゆ。「真宗宝典」、「和文の部」を始む。「三経文類」一部を読終る。日本新聞、元日の付録宮川氏の浮世絵巻画中の人物9人画家を小川氏とす。若し1枚買えば8銭の代価なり。後藤弥九郎君來訪せり。本年は純潔ピュウリタンたれ。品行方正たれ。道徳人を感服せしむるに至れ。学問学理大進栄たれ。故に勉強怠る勿れ。精神正確たれ。気性活発たれ。病疾近寄る勿れ。社界者たれ。高僧たれ。一大聖人たれ。文章家たれ。文学家たれ。記して歳暮の良果を期す。午後、白山氏へ年礼に参る。4人、芝公園を散歩す。他3人寄席に行く。予独り不行。桑門、土田、石田、3氏へ葉書。岡本君へ書面を差出す。以上4通投函。晴天なり。然れども威風凜々たり。

2日 『校異三経文類』一部読み終る。午前、『東洋新報』、昨今の2部を求む。皇城に至り奏仕官拝賀の帰り致し2千人に逢う。2、3の兵士道に礼する。手を挙げおる時間、凡そ1時間也。番兵銃を下ろす時なし。吉野君に至る風邪せり。午後、東洋の地図を開き、大に感考する処ありたり。天晴清。他三は平松宿す。予は不行。

3日 午後、弓削、中山、梅原、大内を訪問す。入湯す。白山氏来る。参河に行くと聞く。清天快日。松島静寿と安本円海へ葉書を出す2通。上田君より葉書着す。稗田君に葉書を差出す。「石州」第壹号を書き始む。

4日 羽子板及び羽子盛んなり。又男子は廐盛なり。予は、郷村にては球を加ううを望み男女、少年に正月、これを与えて快に正月を超さしむべし。昨日、今日に「真像銘文」終る。昨年、「宝典漢文」の部を読みしは、御勤めのかわり佛学の為。又初巻なる為読みたれども、外に漢文を読むの塾練習の為も幾分あり。而して、今年も回り番して和文を読むなれども、他に和文章を書くの練習の為も幾分もあり妙々。年改まりて、陽となる志を改めて、予の心、陽ならず。元日以来不平。陰、尤言、感考に今日迄を送る是か非か。午後3時頃より降雨、初雷鳴る。夜中降雨。

5日 好天。本郷山中を訪ぶ。共に藤堂に至り。渋谷君來りトランプに日を送る。夜、藤の元に宿す。山中、12時迄人物論に付議論ありたり。

6日 山中と共に下宿屋を探る。駒込を巡視し、遂に本郷区駒込追分町2番哲学館に約束し、1時頃、芝宅に帰る。白山氏を訪し、本田に逢い移転を報し。遂に午後4時頃より荷物を仕舞し、5時芝三田を發って本郷に移る。着すとき7時。途中、車夫と談する処あり快なりき。今日も好天。本日、ようよう為替を受取る。

7日 父（兄へも共）書面、専光（寺）へ葉書、最勝（寺）へ葉書、桑門至道へ葉書、日本新聞社へ葉書。以上5通を出す。藤堂を訪風邪、山中に至る風邪。予も北向きの室なる為と強風の為にて軽風邪す。良天なれども寒い。一昨、昨、今、の3日に「一多証文」終る。

8日 昨夕6時より湯上りより直に就寝す。風邪頭痛。夜、数度目さめ、今日の午報迄寝る。實に難儀薬王丸呑む。久しぶりの腹薬。未だ全快せず。朝、飯を控えたる為、大に体弱る。午後、散歩し葛及び砂糖を求め呑む。及び真齡丹を腹す。

9日 昨夜も、7時過ぎより寝せき出て、真齡丹を口に含み寝る。朝は早く起く。午前、何一つなすことなしに送る。午後、藤堂を訪ぶ。彼烈風邪なり。鯛の刺身を食し、梨、ミカンを食す。午後5時返る。舌あれり。甘き物の外皆苦し。久しぶりの、予が病氣也。昨日、今日、良天なれども寒風今たの如きは別して強し。夜早く寝。戸外ビュウビュウ風吹く。余は風邪引けども、先ず、平日と暖かく床中にあり。世には金なくて風邪もこらへ車引の人もあるべし。予が、身上可吾。「唯信抄」文意終る。

10日 強風邪なおらざれども終日、床中に送光す實に苦し。良天。早く寝る。

11日 朝より起く。無為。午後、藤堂を訪ぶ。古河、秦君に逢い、放校の奇談を話し5時迄送光し。今晚も早く寝る。良天弱風されども寒し氣稟烈たり。

12日 無為在宅。咳強く困難せり。火事あり騒ぐ。良天。

13日 每日変わりたることもなく、只咳コンコンに送光するのみ。午後、上野に散歩せり。好天少風あり。妹すゑ午後11時死去せり如く。

14日 天気良しされど風強寒。午後は床中に送日す。

15日 午前、哲学館に至り、入館金月謝を取む。午後、藤堂、山中を訪う。山中は脚氣足立たずという。藤（堂）、予を訪う。予の留守中也。4時返る。日本社へ葉書。「未灯抄」終る。勤労と財宝は相平均するもの也、平均せざるは、和親よりに非ずは不正不徳よりの出来事なり。

16日 午後、哲学館授業を受く。井上哲二郎氏、沢柳の両氏なり。良天。新聞購読暫時、昨日より休む。昨日まで取りたり。今日より取らず。

17日 美天。「支那学」1時間。風邪未だ全快に至らず。10有余日に亘る可恐インフルエンザ也。

18日 美天。午前入湯、11日目なり。水野斎に書面差出。午後、藤堂を訪い夕景迄談したり。「御消息集」終る。

19日 「印度学」あり。「進化論」を聞く。實に当時は帰国と旧財の考查なり。良天有風。

20日 教員皆風邪業皆無。良天有風。實に寸暇なり。国会議事堂消失す。

21日 午前、良天されとも強風。午後は輕風也。棚橋氏「論理学」二時間あり。「口傳抄」終る。

22日 予が経歷に付考うる処ありたり。南條氏の「特言学」講義を聞く。曇天、午後晴れる。郷へ葉書出す。「執持抄」終る。帰国の念交々至る。昨日、「仏教論評」を作る。

23日 湯に入る。美天無風。「願々抄」。「最要抄」。「本願抄」。口部読み終る。2時間授業。晚、藤堂を問い合わせ『反省会雑誌』を読む。10時頃帰宅す。

24日 午前、山中を訪う。種々快談す。「教行信証大意」。「出世無意」。以上2部読終る。良天。午後、風あり毎日如候。道に下谷区区長岡本の葬式を見る兵士、馬車、乗馬車造家、大梅木、祖官員会社等より寄送盛大なるもの也。数千人なるべし禪寺ならん。或いは真宗、清野「論理」、1時間。夜、寝就かれず明ける。午前3時迄考え居たり。

25日 強風晴天。『クルーソー傳』終る。斎入より書面を受く。學問方針のことあり。

あわれむべし妹みの里の姉おすゑ、去る。13日死去せりとのこと。

嗚呼なんと、なんとかなしく、あわれはかなきものぞ。南無阿弥陀佛、南無阿弥陀仏。この報のかなしみいわんかたなし。いかなればこそ、かくはかなきものぞ。言語ののべつくす能はず。

藤堂君來遊、暫くありて、亦秦君來訪せり。碁を打ち、芋を食い、午後を送る。強風甚だし。

休日。昨夕以来強風にて亦咳出ず。秦君同室のある人は風邪にて死したるありと。予は先幸福也。

26日 大に強風。午前、山中を訪う。道中一寸先を、弁せず口も目も鼻も全体砂雪にふき込めらるるよりも困難也。「入学証」哲学館に出す。入湯。「手控録」を作る。「進化学」一時間。

- 27日 午前、中山を訪う。入湯。「改邪抄」終る。満業。良天氣。晚、秦君來り10時半迄碁等に遊ぶ。天ぶらざる。
- 28日 無風晴。掛紙を落とし墨池より墨こぼれ、たもと掛紙を汚し時間におくれ、筆記しにく候。悪日命日なれとも、3時間業。為替着せず困る。
- 29日 無風晴。淨瑠璃は「倭文範」妙味あり。授業皆無。午後、山中訪い共に牛込早稻田木久以町四47番、加川、猪ノ口、に至る。
- 30日 昨夜は、猪ノ口に宿し。午後、帰宿す。聞けば留守中に桑門來り。藤堂、秦君來りたる由。桑君、昨夜、泊まりたりと廣（島）より具を貰う。安本円海、水野斎、岡本（重文）より各葉書を受く。國より為替着す。書面在中兄よりもあり。午後4時発、芝三田に行く。白山を訪し、桑門に宿す。白山、本円三河に行けり。紀元節休業。夜火事。
- 31日 11時発にて帰る。降雨。車に乗る。消失跡、議事堂のストーブ、チムニーの並立を見る。憐れむべし。午後、強雨しけり。授業一時間。為替取りに行けども人多く受取ることを得ず。「歎異抄」終る。新年も春や一月をあとに見て、ゆ免とう深く多すすみ行なり。窓うつあられ、今夜、聞れ口かれ雪なるや否不審なり。もし聞きならば、今年の始めてなり。当冬来、降雪を見ず。日費9円42銭4厘。

## 「春秋日録」 第19巻 天頂山石峯記

明治24年2月

- 1日 日曜日、散髪す。入湯す。10時頃より晴れる。朝、当冬の初雪を見る。「安心決定抄」読む。午後、秦、藤堂君來遊。夜八時迄囲碁す。亭主夜、高中学生と喧嘩す。
- 2日 午前、為替を取りに行く。渋谷、平尾君に逢う。2時間業。風強し。昨夜火事。藤堂来る。郷へ書面差出す。良天。
- 3日 業1時間。斎（三隅在）へ「講話集」、「廻覧始末」を送る。夜、藤堂を訪い、9時半返る。良天。「倭文範」を読む盛（ことごとく）也。斎より書面着。
- 4日 11時、本田君來り。12時過ぎ返る。業3時間。良天。早就寝。火事あり。
- 5日 昨夜より強雨。終日悪天。授業皆無。藤堂來遊。朝火事。「持名抄」始む。
- 6日 入湯。終日強雨。授業三時間。井上哲二郎の講義。顔白し。
- 7日 「人類学」ありたるも知らずため欠席す。1時間業。夜、秦君來遊せり。良天。「無聞書」一部終る。話論を読む。
- 8日 「仏教話論」、「法經」。午後、少し12時前発、本郷、下谷（上野パノラマ当たり音楽学校等を散歩、菊地君等に逢う）。神田（豊本宝閣君に逢へり、神保町当り）。麹町（九段梅等）。牛込（牛込法門明治義会の当りよりを出）、小石川（北昌大学敷地及び法話所、彼の宅）を散歩す。4時20分帰る。快しき。良天。弱風。博物館の裏方は見晴らしよく遙かに筑波山を見、去年旅行を思う。今日は、旧大晦日なり。田舎辺は大変也。東京にては更に何ともなし。反省会へ書面差出す。
- 「真要抄」始む、本の方終る。
- 9日 午前、山中より葉書着。宿を訪う。藤堂と共に、12時迄談す。午後、藤堂來たり。共に近方を散歩。授業2時間。美細雪少々降る。松島君より書面着。夕雨降る。
- 10日 入湯。業1時間。昨夕より強風。今夜となるも止まらず。実に強し。且つ、寒酷にして机上の朱硯の水墨に浸せる筆も凍る。今冬に入りての、初めての大寒也。6時頃大強風中にカンカン、カンカンの火事の鐘をうつ。多久焼けねばよいが。さてもさても、あれあれ隣り火見のカンカン、

カンカンの音只なる中に記之。晴天。「真要妙」終る。この家をも倒さんとする暴風中にカンカンと

は、書きかけたれども麻生飯倉なれば止め、藤堂を訪す。

11日 紀元節、午後、古河、山中を訪へ、共留守。藤を訪いたり。山中来る。5時返る。晴。但、強風尔るに、又青山に火事ありたり。

12日 晴。弱風。藤（堂）と共に谷中近方を、午後2時間散歩。2時間梵学。反雜3部着。

13日 業三時間。昼火事あり。入湯。之より夕、すゑ初月忌に当り読経せん。晚、火事。山中來談。

14日 朝火事。昨日「本懐集」終り。今、「破邪顕正抄」始む。業3時間。夕、山中を訪う。小石川火事あり。7時より8時半迄9時半より、亦麹町辺に火事あり。藤（堂）国会に行く。

15日 午前、藤（堂）及古河、予3人、山中を訪う。彼熱田温泉に行く。午後、古河と共にあすがやま王子、千住、藤を経て返る。足労る。厄介。

16日 親の命日。本日、何ともならずくらしけく、晩、この記をなさんとするに思い出し精神もせずくらしおるの大々不孝とぞんじす。書仕事のところ萬億御内なしおれ、業2時より、1時間訳。不説日。元気よし。晩、桑（門）に至る。寮を訪へども留守。晩、ソバをランプにて食う。火事2度ありき。

17日 入湯。甚だ、不快の日なり。業無く1は欠席す。「破邪顕正抄」終る。兄へ書面を差出す。山中より葉書着、熱海大木方在。曇半。

18日 一時間業。監事え、各々不服を称へ、業少なきを言う。夕、火事。晴白。

19日 山中へ葉書を出す。祖母より葉書着。午後、藤堂来り、碁を打ち、夕景迄をくらす。業に欠席す。1時間ありしならん。晴天。三條実美正一位50有余にして、遂に、あの世に、昨日を以て出立せられ教あれ。嗚呼、兆民のかなしみなり。

20日 広島別院に葉書を差出す。清谷君へ書面を出す。業2時間。午後、藤堂に行きランプに5時迄送る。不勉強驚くに、堪へたり。三條公葬式25日。天子見舞に幸き寝室にてなる。

21日 湯。業1時間あと1は欠。藤堂に行く。本綴じにやる。晩、10時迄、藤来りランプ。岡本（重文）より葉書着。山中より書面着。真宗開祖□真大師御傳歌のみ胸中に令せらる。晴天4日。晩、蕎麦しランプにて。

22日 山中へ、反雜（『反省雑誌』）を送る。藤堂、古河来る。北条を訪う、留守。神保町を散歩し、遂に藤處にて伊藤君と3人口合せを遊ぶ。清天白日。日曜休日。晩、秦君来遊碁を打つ。

23日 午前は無事に送り。書面を国へ出す。業3時間。□弱雨降るも直ちに上ル心配事もなすことなし。

24日 近月無々大々強風2階より町を見ると一砂粉立ち上がり雲をなせり。余の室も、ゴミ入り家動く。業3時間。藤（堂）來たり□□。夕、法苑樹林の閉じたるを取りに行き藤（堂）に寄る。8時に返る。天氣は良し。

25日 学館休業（葬の為）聞く東京□学校は、皆休業なしたりと。9時、藤堂と発足して古河と同道し、道に至り、音羽近方にて見る。其參觀人の多きこと、道更に通行を禁ず。本郷当りも朝出立の節は、多くの人皆見物に足、この方に向う實に古今未曾有のこと也。11時頃迄は列なく。馬車。馬。車等數千至る。11時頃より本列軍樂体兵卒花□国□□三条家総数家族の馬車及び□□□□□大谷光瑩及び新門も見うけおり。赤袈裟。外神官。僧もあり、貴族方數千万の馬車及び兵士大砲數10万人力馬乗兵騎兵等。造花は、昨夜送りし御通り始めてより数分間も、更にとききらず。皆行ききらず、見物人は2里の間百万人ならん。一時帰宅。斎へ「講話集」を送る。良天弱風。

1万5千円国庫より出て国葬也。晚、秦君来遊。

26日 岡本重昌君に書面出す。内へ、「日本新聞」を送る。入湯。午後曇。藤堂來り碁を打ちたり。南條氏、業2時間。「秋夢の巻」。昨日過ぎ、今日すぐう。去る2ヶ月もいる。今年も夢にくら□。勉強する暇も死に近づく。

27日 昨夜降雨。曇然し。午後5時頃より降雨す。業3時間、哲次郎に遅れ、下駄を取られ、晩は雨に逢い、悪日情□□建夜たることも忘れおること憐れなる多し。昨日迄に「歩船抄」終る。本日報恩記始まる。

28日 報恩記終る。風雨、但し、午後7時頃から晴る風。業3時間□□。夜藤堂に至り、ソバを食い、□合せす。9時半返る。

月費7円13銭5厘なり。

## 「春秋日記」 第26巻 天頂山 石峯

明治24年9月

1日 天晴快。北条君來訪。囲碁、花合せ等。午後10時迄。語る。大しめ送光せり。

2日 先月16日は、予が亡父法幢師の7回忌祥月命日にて實に、大切の忌日。精進に当日を守るべき處、心に思うも如何せん、旅行の途次にあり、不得止清日に送光することを得ざりしは、實に遺憾至り由て、本日、暫に忌日の為、朝「大經」上巻、午前の内「大經」下巻を音読せり。

3日 『経卷觀記』を読む。

4日 上野を散歩せり。

5日 ニコライ堂当りを散歩す。

6日 午前、図書館。午後、前田等と家屋を尋如。

7日 近方を散歩せり。馬場当り迄。

8日 夕方より明日にかけて大雨降る。

9日 夕、北条君の処に散歩せり。10時過ぎ返る。風強し。予風邪にかかる。

10日 夕、前田の処に至り、10時過ぎ返る。風あり強し。風邪に付、終日馬鹿に暮らす。

11日 風あり強し。

12日 風邪全快せず。良天。夕、縁日。散歩す。秦君に逢い共に返り、反省会のことを談す。

8時過ぎより雨降る。予は大に将来の事を考う。哲（学館）3年、「梵英学」、「文章」、「仏教」及び「住試」終る事間違都の事也。

13日 昨夜、以来降雨続き、時々強雨の如きは全界闇黒となり。大海をうつし掛が如し。道作物等□□□は、よきか如何に如何に案ぜらる。熊九右エ門を助く。四十九にして返る。「国民の友」33号。日曜日 午後は、晴れたれども、時々強たり。夕、為替着く、有難し候。2時過ぎに至る迄寝につけず。

14日 曇天 午前、為替を受取り、午後図書館に行く。経世新報社へ葉書。良天 但し、夜少し降雨。前田一寸来る。

15日 「経世新報」を取り始む。哲（学）館に、一寸行き「講義録」を選び返る。良天也。藤堂に葉書を出す。入浴す。

16日 業始まる。但し、井上の演説のみ。良天。えらい本気になり勉強せざるべからず。

17日 授業始まる。旧8月15日満月夜、湯島辺散歩。前田にて、9時半迄語り返る。良天夜曇。

18日 降雨す。前田一寸来る。勉強は仕度するものはなし。大に困る、困る。

- 19日 土曜日 曇時々雨降る。前田夕来遊せり。
- 20日 休日 追分祭礼 大にはけ間敷。曇天少し降雨あり。夕、散歩雨に逢い困る。根津神社の祭礼出しども多し。
- 21日 岡本氏、千島行の語話有益快壯にてありき。根津神社に参詣す。今日まで祭り夕方に至り降雨。日中晴天暑かりき。
- 22日 昨夜2時頃からの強雨は、近年あらざるものにて實に大枝を倒にし、うつしかくるかと斗り思はれたり。本日は晴天。井上哲次郎講義始まる。上野なる紅葉去りけり。我が家の向所の山に鹿や口くん。夕方に至り、又雨降る。實に聞く、熱帶地方の夕方毎夜降雨するというの感あり。秦君來遊ありたり。隣室から撰科等を語するを聞くに、「井上は口」と一人言えど、口ひげ見方は、「井上、南條は山師なり」と言へりは、予は、少しと言へども業で2師に受け、又同じ佛門の人たり。元から先輩たれば之を聞き心に承知せざれども、今、予は2師の生涯を説明して、説得せしむることなれば、只聞くのみ。悔しきのみ。後生、本来定りて後、判断する者あるべし。
- 23日 春期祭。雨あり曇。実秋氣孔口に入るが如し。沈思勉強せり。入浴。国へ新聞1号から9号迄送る。午後傘を買わん為出し處、高師範ぎの處にて、雨に逢い、前田に至るも留守。車に乗り帰る。夕方、又散歩のため傘を求む。来年より日記帳賸本のこと。予は、殖民とか航海とか、現今世人の望む日本人へ意見的業世の2男、3男、即ち、同風は守りて、家相続人にやらざるもの及び、女もよく、妹方を撰び國は國にて親類あり、而も出て一家をなし切たるを遂るは、實に出来やすきこと左なり。一家、ことごとく出郷する如きは、先祖の墓等のことも心にかかり何か残り氣は人情とみえたし。夕方に至り散歩す。傘を買う。
- 24日 晴天 『東京西南近県紀行』を書き始む。夕8時頃から雨強く降る。
- 25日 昨日、岡本君から書面着く。晴天。紀行を作る。
- 26日 曇天 業をなく、谷中に散歩す。西口墓前、線香堪へ間なし。入浴す。夕散歩し、雨に逢い大に困る。
- 27日 午前、『東京西南近県紀行』記録し終る。午後、九段神田騒口ニコライ堂等を巡遊す。書物を訪い岡本の写真を買う。斎より葉書着く。曇天。
- 28日 晴天 日の短くなりたる事実に甚だし。内へ、露太子入来の記を送る。岡本君へ書面及び後藤伯の写真を送る。夜、北条君來遊。斎へ葉書を出す。夜、10時迄談す。梵等のこと。
- 29日 晴曇混り。「生理学」始まる。近方を散歩す。夜、雨降る強し。
- 30日 強雨、強風家をかやさんかと恐る。近日、まれの大風也。業無く休みに付き、午後上野、浅草、吾妻橋、馬や橋、両国橋辺を巡視。かぜの影響を調ぶ。川波高く舟通行せず。瓦落ち、杉等の木折れ、廣告標倒れ、市内損す。実多し。返る途中、食べの、この風にて、恐らく 融通かし4、5日は非常の仕事あり。植木屋、屋根屋工、材木屋等大に繁盛すること。両国川岸道に浪打ち上げこと大なり。3時過ぎから晴天。天。近日にまれなる天と夜もなり。星晴天に願れ實に良天文学也。山口氏の「教育史」始る。

## 「春秋日記」 第27巻 天頂山 石峯

明治24年10月

1日 曇天時々小雨。花田君出宿へ転移す。夕、麹町元園町に行き、梵学のことを受けに頼み、葉書を以って、師の講義始まるを報知すと約を得て、九段、勅工場、本郷勅工場を巡視して、8時帰

宅す。反省会へ雑誌を頼みて書面を出す。着付に変ゆ。

2日 只種々の策略を考え目立たる事もなしに消陰す。天然を考え性を知り、世道に関する事を案出す。学理的にあらずの実際的なり。理論至極し、安心立命を得る、理真の信仰心からの宗教及び哲学なり。處世はその安心の上にあり。

3日 菅君から葉書着す。根岸辺を散歩して図書館に至る。「佛教事情」等を読む。今晚、外神田、福田屋にて「哲学研究会」の茶話会に至る。毎月開会等を議決し、委員の一と成る。返り、小田君と同道、大に団結の乏しきを慨したり。この時晴天。諸星寂なり。

4日 暫髪す。不都合を咎めたり。午後、日暮里村王子から秋景黄稻の美術を回り巣鴨に瀧不動を通りて出て、野外遠足をせり。岩崎（弥太郎）の墓地の広大美麗別荘のよき實に感心せり。智徳研修のことを案出せり。夜、『反省会雑誌』六冊着。石田喜三郎氏～書面着。

5日 夕景、佐竹氏を龍岡樓に訪問する。兼一君の病氣見舞いたり。6月下旬から滞在なり。之から親密を得ば、不幸中の幸。岡本氏とも、斗八君病氣より親密となる。予は、幸に無病幸哉。

6日 「研究会」に入る。夕、「講義録」のとじを持ち行き、病院に寄るも面会せず。毎夜、語話をなす。

7日 午後、佐竹兼市君を見舞い就寝中なり。其顔更に放の状なり。青白く未だ、掌て見ざるもの如し。母氏に逢い談論して帰る。製本悪しき為に花田、山中に馬鹿にせられ立腹。近年にナキ程に甚だしく、自ら頑乞を自頭に加え涙将に出んとす。直ちに再製を命じに出立す。車夫、乗れ、乗れという。實に面倒千万人の荷に当り手に傷が實に不幸千万。嗚呼、この口惜立腹。くやしいといふことは独り自らあらば、のことなけん。予は、他人と語るを、實に欲せず。腹のたちくやしき時はいかほどに、みごもおもふもやめられもせず。「佛教国地図」着。

8日 晴 夜風あり。蕎麦す。岡本（重文）から葉書着す。入浴す。

9日 物理、化学始る。夜、隣室に、昨夜以来、大学の吉原にて頭をうたれ傷き白木綿にて包むを見受く。其相談をなす。法科生、昨日の数種の新聞に出て、予も、「改進新聞」を読む。長島雄二郎とか、嗚呼、不法のヤツカイ物学生す哉。

10日 午前、図書館行。今村宇賀治君に面会す。夕、大野弘将来る。湯島辺を散歩す。桑門来り。2人共に宿す。晴天。

11日 午後、予等3人及び岩田氏を訪い。共に4人、薪堀辺谷中等を散歩す。夜、佐竹氏を訪い、種々談話。学校のこと。東京のこと等、兼一君病状至つて重く、オトツサンモーという。彼の苦を見れば、予が病発する程なという心配せり。實の気の毒千万。蕎麦をよばる。9時過ぎ返宅す。朝、入浴3人共。

12日 只屑々談話困学。夜一寸桑門来る。花田に「探偵の未来」来る等面白おもしろ内へと石田へ2通書面出す。皆乗（弟）から葉書着。

13日 麻町より葉書着す。夜、囲碁す。

14日 入浴す。島田講義あり。「語句集」始る。

15日 午前、図書館。夕方、佐竹君を病院へ見舞い。「日光図幅」を見る。歐州形勢動く。

16日 夜、宇賀治を訪うも留守。御茶水橋を始めて渡る。新立派なり。登へ「日本歴史」を送る。  
Saba

17日 新嘗祭休業。午後、麹町南條師宅を訪う。九段にて加藤忠松君に逢う。麻布菅君を訪うも留守。桑門も留守。由て、弥生館に佐治及び原須山の演説を聞く。桑門に夕食し、菅君を訪い、梅原君、中山君は塾のびわ会に行く。予と菅君2人十番寄席に行く。怪談を聞き10時過ぎ菅君に帰り宿す。

- 18日 共に、桑門を訪い舟遊と決め大野を訪う。共に4人、品川から和船にて砲台辺に至る。干満潮共に困難し、7時頃帰港。桑宅に於いてトランプ、蕎麦等にて10時頃臥床。
- 19日 □の堂前より銀座、青物市辺を通らん。10時頃帰宅す。午後6時迄の業には大困り。登より葉書着く。
- 20日 午前、麹町に行く。「散克律」始まる。別状なし。夜、談話過陀す。斉（弟）より葉書着く。
- 21日 朝、佐竹氏より兼一君、昨日、午後6時15分死去せることを報知せらる。直ちに病院屍室を見舞う。10時帰宅して入湯。零時又直に至る。湯棺すみ、人整い、午後4時出棺。大学裏内より浅草本然寺禪に至る。葬式終り車7列、11人にて上野公園前にて、会席料理処に、7時頃夕饗応にあづかる。8時頃帰宅せり。駒六君に面会す。嗚呼、15歳の青年今や新堀火空の中にあり、年々歳々、前相似□□々年々へ不同詣行等席の葬祭上野公園の前人往来幾千万、皆一度は、この郷に入る。それも僅か50年の至70年内ことのみ。人生何は如この漏きや。
- 22日 朝、拂掃をなす。本月は、一昨夜、小雨に毎々晴天。無雨哉。僧多ものは40迄教員をなし、而して後、口長しとも戻はり品位つき生涯の活経の資足り教育等に経験熟練なる世に、執着落き色情等の減じたる人たるべし。
- 23日 麹町行。宇野君に逢う。
- 24日 入浴。高島の2時間話しあり。夜、秦君来り。外5、6名10時過ぎに至る迄、遊芸す。
- 25日 昨日、佐竹氏訪せるも留守中也き。由て、予、朝訪問す。駒六、熊5夫妻等あり面会す。今朝、帰郷せられたり。麟祥院にて松本、武士道の話し。石川木母の話の演説傍聴す。夜、岩田氏と、予等3人と4人、上野を散歩しステキをひらう。夜10時頃迄、遊芸□□せり。
- 26日 国へと斉（弟）へと葉書2通出す。夜、菅君来宿せり。西蓮寺報恩講に一寸参詣す。
- 27日 麹町より葉書着。3人と菅君と神泉亭の菊人形を見る。上野勧工場を散歩して帰る。夜、雨降る。本月稀のこと也。夜、岩田君來遊せり。
- 28日 雨天少風あり。佐□、吉原にてモルヒネを呑み、昨日新聞に顕る。朝、大地震搖る。家大に震う。
- 29日 古河君來訪あり。談笑せり。昨日、地震にて美濃尾張、大阪辺数千の死傷等□□□たる由。
- 30日 麹町行。今朝3時半頃、医学校等15、6戸ばかり近火あり。桑門帰尾す。北条君來訪せり。
- 31日 岩田氏を一寸訪ねる。入浴す。岩田氏來訪。囮碁送夜す。中学に一寸至る。

## 「春秋日記」 卷32

天頂山石峰

明治25年3月

1日 7時起。「本典信巻」を読味し始む。麹町行。降雨。午後、晴4時頃より強風起る。中山君との金の差引終り、月謝を收む。本日より大改心。万事白明、清潔、銳敏、晚強、節儉、義理、実行、信心、進考、退案、見聞、博深、高経験、万事注意肝要、鍛練、思想、人情、視察。麦生君、郁文館入学。松島及び九州の其地2ヶ所に実質つむ。竹あり印及ステッキ等に用ゆ。竹根にも印を刻むことを得る黒住派の大旨は誠と天地の二語にあるが如し。予の信と天然に配合せるものの如し。のぞみあり、こころさしあり。これひとのこころ越さめん。天下、経論、宗教を以ては天下の人心をして安堵せしめ氣（忌）憚を以ては海陸、山河、国土、社界を驚醒せん。これ予も生涯の希望と志願也。大野君來遊せり。支那学（易）を調ぶ。

2日 予は「不動」と「弥陀如来」と二尊を信奉す。予が一生も又此道を行い、この志願を説き教ゆるにあり「処世道心を安穏の極楽に遊ばしむるの道」、「智徳雄賛皆」この二より出つ。嗚呼、幸福なるはこの二尊を信奉する予なる哉。入湯、教育史を調ぶ。島田の講義あり。夜、高見君を訪い名士の逸話等顔白き話しあり。蕎麦をよばる。11時頃帰る。雨降り始む。

3日 午前、脳図を書き、午後業1時間。本山君の室に至り囲碁。10時迄遊ぶ。福岡人士に面す。

4日 麴町行。寺田福寿の寺にて小栗栖香頂の説教を聞く。氏50にして、信を得、学問の為に信得られず。全く信は学問をすべてたるべき忘れたるべきに得らる。法然上人の如き学者にして尚学問をすべて信を得られたり。東京は入梅の候よりも春2、3月頃、最も風雨多し。晚、市中を散歩して「山田長政の傳」を求め残りの所の読み終る。予は秀吉よりも外国に成責あるを以て氏を推す。氏の外国に顯せる光明、功名は實に崇尚にして勇胆ある。古今例なし。又氏が浅間神を信ずるが如き、甚だ感心する所也。氏の顔及頭の風を見れば覚えず覚えず。予が心の奥を感動せしむ。嗚呼、豪傑哉。空論虚想の今日、東洋を談し、興亞策を議する者何ぞ実地なしたるの氏を拝する。予と共に談するに足らんや。夜大に雨降る。山本君等酒会あり。

5日 午前、宮田君下へ転室。囲碁等に遊ぶ。午後、業なし。大雨、道に困る。入湯。無為構想手習す。金の困難殆んど去り、只社交上困難不快未去。

6日 相いも変わらず強雨。図書館行。大塩平八郎の傳を読む。午後、1時より郷友会に出つ。出席12、3人。口事語話遊して帰る。5時過ぎ也。大島、島田、石見屋等に面会す。

7日 午前晴れ。午後より少雨。夜、佐々木君來遊。益ある口田話を聞く。大野來遊。寝るとき6時半。12時頃、本郷6丁目大学前、火事ありたり。国より法話のことに付き葉書着。

8日 麴町行。コンジュゲーションとなる。今日より井上円了の業始まるこみを記す。夜、前田と語早く寝る。巣鴨辺火事、不美切せしにもかかわらず行く。遠くにして帰る。夜、床屋にてランプを机上より落としホヤ割り、手に怪我し損す。心大に腹立ち自身の頭を打つ。4、5回書（古今）に油少しかかる。實に不快。

9日 手帳を綴じなど無為に暮らす。業2時間。晩、大野を訪うも留守。高見天然痘に罹る。夜、前田の處に遊ぶ。

10日 午前、「ありの満ま雲枕」に歌を書きたり。午後、業5時間。夜、降雪。

11日 雪2寸ばかり降る。麹町行を止め欠席せり。この時風邪。昨日、井上円了の巡回の話しあり。当夏、金儲けに北海道に行かれか一挙両徳也。晩、大野に行き10時頃迄遊談して帰る。

12日 午前、「神皇正統記」等を読む。校が終わり高見君天然痘を見舞う。夜、渋屋の處に談し、大野君來談せり。雨大に夜に入り降り南風吹く。

13日 芝に行んとせしも大雨風の為にゆかず、図書館行。田中鶴吉傳等を読む。上野を散歩し帰る。菅君來遊。10時頃迄談話をして寝る。麦生君留守に来る。強雨。午後に至り晴る。品川大臣内務を去る。

14日 朝、菅君と上野を散歩し、済世学社の運動会を見る。天然痘流行止まず。山中背に大腫れ物出来困る。哲学館生芳原宛話しをなすもの数名あり。不潔極まりなし。入浴せり。久しぶり足の裏に傷せし為也。

15日 麴町行。藤堂に葉書を出す。夜11時頃迄渋屋君と談す。

16日 図書館行。出世鏡田中鶴吉傳を読み感ず。又雲井龍雄の傳をも読む。夜、大野に至り、10時迄語して帰る。

17日 午前、「旧英文」予の作を見る。24年は少しも目的の英文に冷坦なるを知り、来月、8日、「新仏教徒」なる「英文雑誌」を出さしことを企つ成就するや否。晩、大野來遊。生芋焼、蕎

麦、餅腹ふとくせり。大野に一寸英文会のことを話す。彼冷坦也。

18日 降雨。麹町行。夜、英文会に付き考へ作文をも少しなせり。昨日は、より考へて少し危ぶみたれども今日は、弾むことになれり。仏教の全面を汚しはせぬかと思へども又尓もあらずと考へたり。この業の如き作文つたなきも志も高く目的も良く、熱心もあり、不得手のものゆへ仕様もなきこと(作文)又仏教徒中にも主に青年のものの悲みにせむ。さほど人もふしることなるべし。そしらばそれ。一度は仕遂ずにおくものか夜床に就くも眠られず12時過ぎに至る。

19日 入湯。降雨。俵、大村、大野を訪うも皆留守。駿河台の妖怪の話を聞きたたり。号外出たり。何しや菅君より葉書着。毎日天気悪く、且つ、寒きには大閉口せり。英文会のこと、一時も忘る暇なし。成就せば、大快喜。北行思い立ちてならず強行。又ならずこの度の事ならば實に予は不幸のもの也。この度斗りは必ふへなるものの如き。予算しつかりつけり。8時頃桑門来る。久しうぶり也。湯薦して大野を訪うも留守。高見に至り談話して桑門は大野に宿し、予は帰る。風あり甚だ寒し。

20日 思う通りにならぬか世の中哉。去年より久し振り桑門が丁度昨夜、来り宿したるとは又奇才の奇云うべし。由て芝に行んとせしについ遅れたり。尔れともなお行んととせしに遂に時かなはざりき。朝一寸一文を書き、大野に至り桑と共に帰り、午後1時頃、大野、桑門、予3人出て、青木聖一と巻く見る。駿河台にて桑門に分れ大野と白狐荷なりを探し得。江木に寄り神田を回り三省堂にて英文印刷のこと問うも撥ねつけられいうがしたり。大に落胆。し、白山に相談に行くこともせず。其上志満山にて16銭も使い寒いのに九段を回り実に不快しき春秀皇礼祭と日曜重りて而も不幸の休日なる哉。之が為、数日も英誌上に差支へたり。只、明後日夜、菅君訪問に万事聞正だすに外道なし。大野の写真一葉を貰う。

22日 麹町行。白山に英文のこと相談し賛成を得、赤坂に共に行き相談相整い南條氏へ葉書を出さし。天ぷら飯によばれて、午後2時過ぎ帰宅。業2時間受けて5時より直に菅君に行く。山中等來たり篠原等も在り。地学会に行き上田寅一の台灣生蕃の記を聞き花房曾我等の顔を見る。10時頃帰えり菅の宅に寝る。少し腹あい悪し。

21日 日記を取り違え前後せり。午前むやくや考へ只事業の成就せんことを乞い祈れり。午後業の暇に、麦生を訪うたり。菅より葉書着。

23日 朝、篠原君の調べを得て出版条例を聞くことを得たり。其喜びたとえかたなし。實に謝せざるべからず。10時頃より帰りかけ藤堂の為替80銭受け帰る。業後、秦君に相談に行く。彼中々の人物にて秀正する人なきを以て嫌みを唱え賛成人尤無きやの如く宣教会井上等のことを談せり。之が為に予は實に心中不満無形の涙は□□降る。夜は別して雨ひどく落胆せり。尔れども彼全く反するにあらざればあるいは加神のなすやもはかられず。只夫のみを頼むのみ。湯に入りて帰る。今日、山中にも話したり。今日、宣教会並に文学寮を始め内学院大学寮高中(京)尋中へて書面を出せり。この返事如何にや。宣教会と南條との二方先ず整えば殆んど成りたるもの如し實にこの事業の為には夜も寝られずして心配し、只佛庵の加びあらば4月8日に「新仏教徒」の生れんこと必せり。只無事進行を祈るのみ。ああ辛き哉。ああ快なる哉。

24日 頭痛致しこまる。午後、業3時間受けて残りは捨おき帰る。あまり辛き為也。畳頭かへ変なり。ひどく踏み付け人を驚かす。掃除して牛肉を命じ沢山やり國より唯一もち來りたる一粒金丹四年振りのものを一心込めて即能書きの如くして飲み、七時頃より寝る。熱出てたわごとを考え困難したれとも腹の少しづつ下りしも止まりたり。

25日 今日はスッパリ病い良し。大に有難し。麹町に行き白山とも話し、子安にも話し、南條氏のダンマパダを貸されたるを借り帰る。又南條氏は、今日、名古屋地方へ出立なれば忙しくとてこ

の書の外に英文なし。落胆せり。山本君に、この事件を話す。半賛成。高見來遊10時迄話せり。大野にも一寸寄り白狐を話す。

26日 昨日、藤堂より書面又荷物すみ、為替口やと談し秦君來り少し激したる話しをなし岩田來り、井上円了に相談するも金の為に付き危ぶむ秀正者はある考え也。寺田に寄るも留守。午後松谷さん到着来。夜、牛肉10片7、8名会合。11時迄手飲馬食由て寝る。膝相撲とりたり。

27日 隠遁の志盛んにして厭世見聞皆即気に障る。嗚呼、如何してか世に處せん。本日は終日寝て暮らす。大強風降り。

28日 大野一寸寄る。業無し。少し散歩して帰る。どおも悪い。数日前より悪く気分、足腰、頭痛、寒氣の為にリュウマチの様に手足身體總て痛く気持ち悪く氣張らず。死すにはあらざるかと遺言のことまでも考え。先ず予は決心せることあり。今日よりは例え少々也とも金を貯め財産を造る手段をとり数100万の金なり。而して後、業には着手すべきこと必ず先ず実行の牧畜農業鉱山其他、布教等に金を貯めること第一肝要也。晩、菅及び松谷来る。蕎麦す。二人宿す。

29日 麴町に行くを忘れる。ベタレ雪1寸余も降り積りたり。井哲休。入湯。

30日 終日、気分悪しき為に寝る。風甚だ強し但し、晴。業欠席。

31日 大野來り。共に高見を訪い、ブタ肉をなし、共に4人上野根岸を散歩し帰る。大に気分快方し亭主と談し、昨日、今日粥を食するもドーも具合悪し。子安、白山へ2葉書を出す。本日は實に良い天気なりき。明日欠席の為也。

## 「春秋日記」

## 卷33

## 天頂山石峯

明治25年4月

1日 今日頃より大に気分よし。晩、大野の所に行き談話す。山中も行く。雨ひどく、予は泊まる。本山君転宿。学校休業1週間。麹行を欠席。

2日 朝帰る。早朝のこと。松谷氏來遊。囲碁す。風中々より吹く。気分大によし。今日而して吉丸鉄太郎来る。晩、入湯。草津而して高見により談話。眠り夕食をよばれ10時頃迄居て帰る。蕎麦す。

3日 弁当持つて大野と出んとする時、岩田來遊。共に岩氏宿に行き囲碁す。菜食して3人上野園遊会見物に行く。人出多し。中集会堂に至りカクラン氏のスペーゼン伝導師の伝をなすを聞き桑門來り、北条氏來遊B&Fして夜大野宿に1時遊び行く。帰る北氏宿す。

4日 午前、碁等に日を送り。午後、5人共に出て予は独りと分れ、両国辺や神田ステーション通を散歩し午時半過ぎ帰る。晩、北条君語話す。金が欲しくてたまらぬ様になる。何か造金策をなさざるべからず。

5日 午前、麹町行。文典、100ページ迄進む。良天。午後、石田君來語、遊、歌を歌い語す。雑誌の綴じ4冊出来る。晩、禁口うけ少語。女将さんと語話。この家賃13円。教口100円。この家代400円。この家への払也の書付勘定済む。先月入費甚だ多く實に困り國へ面目なし。小雨降る。先月B代甚だ多き為、宿払い甚だ多く貧生何ぞ之に堪へんや。實に實に金の為には困難せり。負けぬ気の予に世は皆反対なる。實に不快也。世の人等が交際などとなにかれ言へど何を準表にして言う。口口れとして交親を結はさるものあらんや。予口口に一步も他人に譲らんや。藤堂より葉書着く。

6日 橋大心君降誕会話の為来る。3時頃入浴。直ちに岩田を訪い囲碁。殿10番夜12時に至り帰る。犬吠え星をふんで帰る。晴天なりき。

7日 朝、発して神田、麹町、飲倉を経て芝、桑門に至り、白山を訪い、桑と共に弥生館、油絵、十二支等の画を見物して火事跡を見る。菅君に寄り、これより本通りを経て6時頃帰る。晩、高見君話しに来る。渋屋の所に語しに行く。吉丸、岩田来に至しき。曇天。

8日 祢尊御降誕の聖日なり。麹町行。今日より午前8時半より始めとなす。12時帰り、食後一休み。神田、斯文学会に於いて降誕会に行く。講堂の聴者、古田、大内、島地、3演舌あり。いずれも人をして感動せしめ誰にも愉快を与えたるは満足の至りなり。今頃、三田塾に於いても演舌薩摩枇杷などり盛会の趣きなり。嗚呼、何ぞ夫れ快なるや。4時半帰る。前田、京都より帰り種々京の有様を聞き語、1時間斗りにして高見君を訪い、幸田共に3人、大野を訪う。上野の見晴らしにて大声詩歌、吟詠など快。夜、9時半に至る。そして宗教上の事禅悟の如き快談。時を移し、月を伏して3人散歩して帰る。来月、今夜の月高見君同じ月を万里の孤客となりて見るにあらずや等、実に壮快の感ありき。10時半頃臥床。本日の良天、□天、實に好時期、桜花正に開んとす。嗚呼、有難哉。この聖日を清浄に愉快に迎え而も送りたること。今夜、山本の所に宴会ありたる様子なり。宇宙の光を施本す。会費5銭也。桑門君より葉書着。国へ「法話」を送る。

9日 桑門へ葉書を出す。午前、入浴す。湯屋昨日、新築せり。業なし。清野を1時間聞いて帰る。岩田君來遊。掃除せり。夏日の如く温熱せり。晩、散歩方々麦生を訪う。餅を持ち至る。トランプ、囲碁1回なす。9時頃帰る。其時の大風砂粉を吹ろし眼前の光さえ見えざる迄口されと明月皎々たり。

10日 午前1時20分、神田猿楽町より出火強風につれて神保町、錦町より日本橋に向けて進行数千戸消失。朝7時、約束通り大野、高見、幸田来り、共に原、坂山を訪う。出他せんとて面会得ず。共に九段に至り猛火を見る。焼跡を通り火事のぐるりを一周す。實に小川町等皆焼け残酷。電灯会社区役所、錦成学校、法学院、女学院、国民英学会、皆焼け松谷君の下宿焼け古川の所に移り斯文学会また焼く。直ちに入浴。松谷氏來り語話。高見君、午後4時頃帰る。今日の強風、近日になく砂室に満ち□□□□ならず。他にも三田等火事ありたり。梅原、菅に面す。大野、芝より帰り、夜蕎麦す。

11日 国へと岡本へと2通葉書を出す。□骨、昨日持ち来る。昨日の火事4700戸の全焼70戸の半焼。死人19内15人、勧工場内にて也と。今日より業始まる。大宮君「奥法護国扶教同志会」のことを予に談す。本日は風少なく寒く半晴半曇也。この夜火事あり又風あり。

12日 神田大火死人24人。又10日の晩には芝西久保260戸消失。石上北天の寺も焼く。昨夜は芝愛宕下火事500戸消失。實に近頃は火事通り内にも芝合計千余戸の火事あり。麹町行。風強し。午後より強雨。学校にて井哲試問を3年生になす不出来しき。

13日 図書館行。「斐イチ一島」、「水泳誌」、「東邦協会報告」、「八宗講要義」、「Anthropological Ptnbies.」等を読む。晩、麦生君來語。四方山の話あり。蕎麦2杯、餅沢山やり、花田の室に至り岩田君らに逢い囲碁2敗。又蕎麦1杯。午前1時頃迄話して寝る。本日、午前雨。午後晴。明日朝、醉沈□を味う。今村君愛宕下火事で焼け出され島本君も同様なる赴也。

14日 朝、上野桜を見る最好時期實に美吾妻橋に至ル向島まだ早し。浅草公園を散歩して谷中を経て帰る。入浴。業5時間。郁文館、小金井行。但し、桜まだ早し。晩、高見を訪うも留守。散歩して帰る。芝辺に当り火事見る。京より皆乘葉書を送る。

15日 麹町行。九段桜を見る。1、2日早し。業5時間。午後雨降る。晩、高見君及神崎君來談遊せり。国語を少々見学ぶ。

16日 「選択集」を大いに読む。図書館行。「地学雑誌」を読み「人類学会雑誌」にてアイヌの研究を喜びほいと、のと、かみ、しゃも、あいぬ等の言語より彼等の宗教心まであり、又土人の演

舌筆記に□2人へ送かための人、日本より来り害を教えゆ樽と徳利の口一つなるを言う。11時大野と共に出て東照宮舞上野桜を見、弁天に散歩し池中尺5、6寸の魚のある等を見共に帰り中飯後、業に行く。山岡の寺において獨園の講義ある由3時より麦生に至り桜を見又大学生□□來り共に沿阪君ら共にトランプをなし。2人の女來り。百人首□□かるく餅こかし、蕎麦を夕食とし、近方を4人にて散歩し木戸の屋敷より谷あい農家の景色実により菜、大根を洗い、麦君溝を飛びて派丸苦快。夜10じ迄遊び大学生と共に同道帰る。其間旅行に付き語す。話しあり彼中々大旅行家也。11時頃寝る桜桜。大盛りなり。石へ森岡病院より今日出て庵へ帰る。今日、實に快に日を送る良天なりき。上野の桜少し散る人出多し皆乗京都へ葉書を出す。

17日 日曜日。曇天。□□□□□。雑誌を読みナップの文を心得。10時頃大野、高見、甲田、予4人、小石川伝通院を経、牛込、仏仙堀を訪う。午後なるより駒留橋辺より護国寺に至り、芋と餅にて中食をなし再び仏仙に至り、心□論の講尺出問他其他話しを聞きたり。彼の説は心理的、生理学、心理学、医学と言うを説とせるものの如し腹惑□□、脳一、背セキー、全体一也。予は大に感す。色情を絶たん為に何か行をなさんとせんにこの行こそ、適當ならんと言しむ。面白き話しあれども略之。晩、高見を訪う。塩煎餅、岩田君も来遊にて9じすぎ迄愉快の話をなして帰る。向島桜見物人余程多きが如し。今晚寝時20分斗り、座禅腹惑を行す。中々ならず。

18日 降雨、大学病院に森（豊本）を訪うも午前入れず。大学中を巡りて帰り入湯す。朝、座禅40分斗りなす。井上円了話しあり。曰く「学問は人をして□□のへたらしむ。即ち品位、高尚になすにあり。東京の書生多く誤り、父兄の沢山に逢い家業をなさず。由って地方人、東京に出さるに至る。之に地方にこの館の生の如きと行きて如この人々に教ゆるは良き事等の話しあり花田□や午前來り絶色のことなと話す夜山かる哲学上の話し等せり。

19日 良天。麹町行。三崎町の家大に入る。業5時間。晩、大野を訪うも彼留守。由って上野篇り不忍辺を巡散歩して帰る。晩、B一ふ。味よからず。山中、貸切に大学を賞嘆なるは聞くも片腹痛きこと。彼外面淡白神不□白、悟らざる一つの被面者の如し。又機を得さるより其実情を顧ざるのみ。少言のものは心中實に多くの小人の心を抱く能り言うものは却って少し語白也。予も近年は不快爽の人になりたり。

20日 午前、神田焼跡を巡見す。臨済宗有志吟集館跡にて追悼会追あり。「観念法門」を読む。午後、業なく、全生庵荻野獨園の臨済・・禪師錄の講尺を聞く。大学生など多し。旧人不奮境、奮境不奮人等四景見等面白き講義儀式も多し。今日、金5円山中より得、外に50銭貸となる。晩、岩田を訪い囲碁せり。今日は大に気分悪く勞したるもの如し。良天。但し風あり。

21日 気分甚だ悪し。午前、就床。午後、業後、全生庵に荻野の講尺を聞く。今日のはある一つの大棹なる由。武田、大野、□□3人、上野を散歩し桜もちを食い回りて5時過ぎ帰る。晩、高見を訪うも大野、幸田3人、3共小金行の由。晩、雨降る。種々次々に動植の俗説等、顔白き話を佐藤され、部屋にてなす。

22日 午前6時40分頃出発。麹町行。白山欠。良天。藤堂の頼みものを買い荷造りして、夜出する間。業間入浴。晩、菜市縁日を散歩。甚だ賑やか。新発明、便利、好□美、甘味等□々並べて人の情けを動かして金を取る。上手上手。菅君より葉書を受く。藤堂、菅、白山へ各葉書を出す。気分少しよろし。良天なるゆえならん。

23日 午前（朝）散髪に行き、直ちに高見を訪い主に宗教の話及び種々世談。甲田2時頃より共に2人出て谷中を経て全生庵にて大禪の講義を聞き、ある處は高見の為道なしと思えば断見の外道・・・悟にあり。ムーッと悟るにあり、これより大野加わり3人前だりがけ予の宿に来り、B一ふ。夜九時過ぎ迄快に□を送る。業なし。岡本より葉書着。

24日 日曜。午後、哲学研究会演舌あり、哲学館に於いて柳沢の「教学争有心無心論」、濱田健次郎の「鉄道経済論」、加藤弘之の「対等条約交際」(列国と)の演舌ありき。松谷君来り。橘、金山君と囲碁せり。予も打つ。又晩に至り岩田君と打ちたり。夜、大野来る。良天。宗教学術につき少し議論。大野、山中、予の3人の間に起こる。

25日 晩、古河、梅野君来遊、近日になき大々天。甚だ困るとな。晩、そこらを散歩す。真宗館開館開業出来人多く広し。夜、店をぐるり回りて帰る。

26日 有心論を考え、且つ、有形有地状極東克を考うこと。業1時間。「審美学」3、聞き他は口で帰る。井哲(井上哲次郎)を欠席す。午後時5発足。菅君に行く。口田と同行。同道7人にて地学協会演舌を聞く。加藤益雄氏のヴホル河旅行。アストラカン漁業盛大の話し也き。晩、時事通信社に宿す。降雨せり。榎本武口氏も地学会に來たれり。

27日 9時発足馬車、人力にて目がね迄帰り。但し三田館にて傘を買い替える為也。降雨せり。業を受く。今朝、悪因縁と口せる。横浜にて西洋人ロビンソン氏の話を読む。

28日 午前、グズグス業をやり。北条君来る。晩、古(田)、宇田を訪い、高見帰り、大野来り。

10

時過ぎ迄快に談して帰る。加藤の自口々他の講義あり。

29日 中央亞細亞地理を調ぶ。真々顔白し。下宿、夫婦間波浪起り念言聞こゆ。囲碁す。入浴す。

30日 業なし。囲碁す。晩、口田、大野、下鴨君等来り。12時頃迄談話、囲碁せり。餅を食いうま人ありき。雨降りて甚だ悪天氣。但し、晩、晴星を見ゆ。

## 「春秋日記」

## 卷34

## 石峰誌

明治25年5月

1日 午前、俵君來訪あり。懇親会通知を得、山中、転宿せんとしてなさず。午後、浅草口遊館に於いて石見国郷友懇親会に出席す。上柳成は歴々の人に面す。円左の話し及び講談あり。演舌なすものあり。笑談2時より始まり午後6時頃終わる。剣舞をなせり。会者6、70名もありき。同日、同家にて出雲国懇親会あり。上野迄車にて大野を訪い、夜10時すぎ迄談話して止宿す。本日、霧深く曇天。晩に至り降雨せり。日曜日。

2日 朝、大野と共に帰る。降雨甚だし。大に困る。午前、大野囲碁遊ぶ。晩迄、大野在留囲碁。花田となし遊ぶ。業1時間もなし。降雨甚だしき大に困る。

3日 降雨止まず。口とも、山中転宿す。入浴せり。午後雨止む。晩、花田の下にて談話せり。談詠の人、北海道人、数学、地理の談をなす。

4日 午前、図書館に行。館中大野、桑門に逢い上野を散歩して帰り。午後、桑門来り。4時頃迄談話。彼帰り、予業に行く。端午にて数日以前より鯉の上りを上ぐ。白山方の個人に騙され謬断書き入獄實に気の毒の至り。代言人にかけは千有余円もかかるとの事。晩、佐藤の室にて囲碁11時頃迄。山中下にて宿す。古口論改を調ぶ。

5日 午前、図書館行。「東邦協会雑誌」を読む。其快言へからす。実に壯快。午後、1時間。休中大宮君を世尊院に訪う。談話して帰る。晩、本郷を散歩し「亞細亞」37号を求め、宇賀治を訪うも彼帰国。山中の宅分からず。高見も留守。散歩して帰る。

6日 午前、家を出るや雨降り出し麹町行。普門口を開く。九段招魂祭兵陽の参拝を見る。森(豊本)を訪い談話3時に至り帰り。直ちに校に行くも休業。由て高見を訪い古宇田君と囲碁。11時迄笑談して帰る。これ、今日の日記也。夜に至り晴れる。

7日 午前、口下にて話す。入浴す。鳥飼い。山中来る。晩、古(田)、宇田来り蕎麦す。

8日 9時発足下谷通りステーションを経、中洲に出て、渡しにて深川に渡り、永代は誌り越中島渕崎海岸直行。東進北行。数回の渡しを渡り小松川に出て、橋を渡り、左折中川岸に出て渡しを亘り木子川より百口園に出て、千住を経て谷中を過ぎ、午後6時帰り着す。8時頃入浴す。里程8、9里。晴天。風あり。

9日 午前、大野来る。昨日、一昨日、不口口、晩、山中を訪う。一人ありより話す由。デドロボーノ上手巧なる話し等をなす。9時頃ツツヂヲ及に本地名鑑を見て帰る。宇賀治、吉野へ2通葉書を出す。本日、晴天白日。

10日 降雨強く、道悪しく大困難。其上学校にて下駄を盗られ大に不平。井哲の時に下駄を盗らる。三度。而も雨降りの日にのみ。而してこの内は笠を盗られし盜まるのみにても中々貧生叶わず。實に立腹す。仕方のないとは仕様もない。瘤癩起こりたまらず。能くも能雲降ること気合の悪いこと。

11日 雨。予の間に当りて戸を閉め閑。佐藤の室にて談笑、囲碁。晩、山中、繩田来る。11時頃迄遊ぶ。菅君より葉書着。国元より為替状着す。財政困難。國も、予も共に、寸前もならず。

12日 朝、高見来る。神崎と3人小石川植物園行。散歩して帰る。かげ為替を受取る。午後、入浴。晩、山中を訪い、薬師縁日を遊歩して9時帰る。本日は、晴天白日。近日になき好天氣也き。麦わら帽子を求む。金10円山中に渡す。

13日 鞠町行。本山と囲碁。午後、高見を訪い、大野とバラ新当たりを散歩して4時より業。晩、グツグツ宇賀治より葉書。

14日 曇。□□□り。橘氏等來。午後、大野來。晩、共に散歩して根岸に行き宿す。根岸の祭礼舞を見る。

15日 曇及雨。朝、発して家を尋ね高見に寄り、国会□□□の件等の事を新聞を見る。12時、大野と帰り。5時頃より家探しに三田氏、団子に行。□出てて花田、大野酔い、蕎麦をよばれ帰る。大に困る。この時10時頃飯食す。これより隣室、橘、金山の囲碁を見2時頃に至り寝る。

16日 降雨。甚だし同く橘の囲碁を見る。顔よし。午前、大野帰宅せり。晩、大野来る。麦生君來談。晩、遅く晴。

17日 午後、大野を訪う。午前、入浴。この日、大野、自炊屋に転宅。晩景至り掃払致し共に大野と帰る。

18日 朝、転宿のことを毛宿屋に告げ、本山、岩田、山中を訪う。午後、転宿す。佐藤氏等と囲碁す。業を終え花田に至り下宿の勘定を行つて腹へりたるも食わせざるより去て、自炊用品を勧工場等にて買い求め切通しを通り8時頃帰る。蕎麦あり食す。花田来り。来朝のパンを食い茶を飲みたり。11時頃寝る。快談せり。□□□ぎすなく。

19日 朝、飯を炊き菜を作る為買に出つ。顔白くこしらへ大食。談笑畳替え来り。かゆ高見君、1友人と共に來談顔白く12時頃帰る。大野芝行。国及越前へ葉書を出し、菅君に手紙を出す。業後、渋屋に寄り帰る。古宇田来遊。晩、花田、渋屋、鳥飼い来遊。笛口しき隣の前の家三味線又好音聞こゆ。加藤君に名刺を与え小田君にも同じく与う。晴天。蚊多し。鞠町へ葉書出す。

# 春秋日記 第24号 明治27年1月1日

倭石州天頂山淨蓮寺精舍沙門石峯

## 春秋日記 第54巻 石峯記

明治27年1月

1日 4時晨起。6時10分勤行終り。7時晨食終り、漸々年始礼者有り。予其引受をなす。2時頃に至り、来客薄らぐ。数うれば300人なり。大内青巒、南條文雄の二師に書面を出す。此夜火廻はし、火消しなど遊戯をなす。

2日 桑門、白山、平松、井円、小安、麦生、森岡、松田、□□に葉書を出し、古河（同窓を込め）書面を出す。最勝寺より葉書を受く。明治17年の正月を重ねて以来、今春始めて逢う。今年の1月何とか言う。飯田筆太当寺檀家に來りたるも専光寺より元を言ひて帰るを進む。専光寺に掛合うべし。銀色界中金色人。

3日 年始筆末の開封す。百円五十銭斗り也。昨年の秋布施高報恩講も30円斗り也。昨年、当山報恩講、米4石金10円也。□山、及び明清寺より葉書受く。

4日 東温讓君の追葬勤行をなす。晩、西谷榎木田小寄り。

5日 当山世代法名忌日表を作る。休石、石田屋へ年始行。長井、藤堂、麦生、森岡より葉書着。

6日 日中、惣吉報恩講行。好天氣也。

7日 昨夜より雪降る。終日続く。悪天氣。晩、下の橋行。

8日 終日、天氣悪し。菅君より葉書着す。

9日 同じく雪降る。

10日 昼、岩田屋報恩講法座。晩、淨円と共に石ヶ渕報恩講。今日は好天氣也。晩、少く口たり。

11日 同、同家法事、三部経。晩、下ヶ原法座。

12日 朝、隠居御座。日中、出ヶ原御座共に拙著を話す。晩帰る。

13日 菅の屋為替の為行。永昌寺へ寄り、夕景まで談す。

14日 永昌寺古録を写す。

15日 淨蓮寺地図を製す。

16日 午後、漆谷仙次より小寄り。晩、岡田屋敷、四十九日法事行。

17日 西村□香寺行5時着。

18日 同寺滞在。石州法中協議。去る15日（実は13日）前大谷門跡御遷紀、一組より□□寺、二組より正万寺上京に決す。

19日 滞在会者14、5名中、多くは出立。専竜、□明、明清、淨慶等残り大談話。

20日 早朝発足12時、門田着。権房と話し、雪降る。笠松をば□治と共に越し、4時帰着。

21日 嶽如上人莊嚴むき。其他□に付き多忙。西依からと立花から2通書面着。

22日 □□を造る。20日頃、雪3寸降りしと。

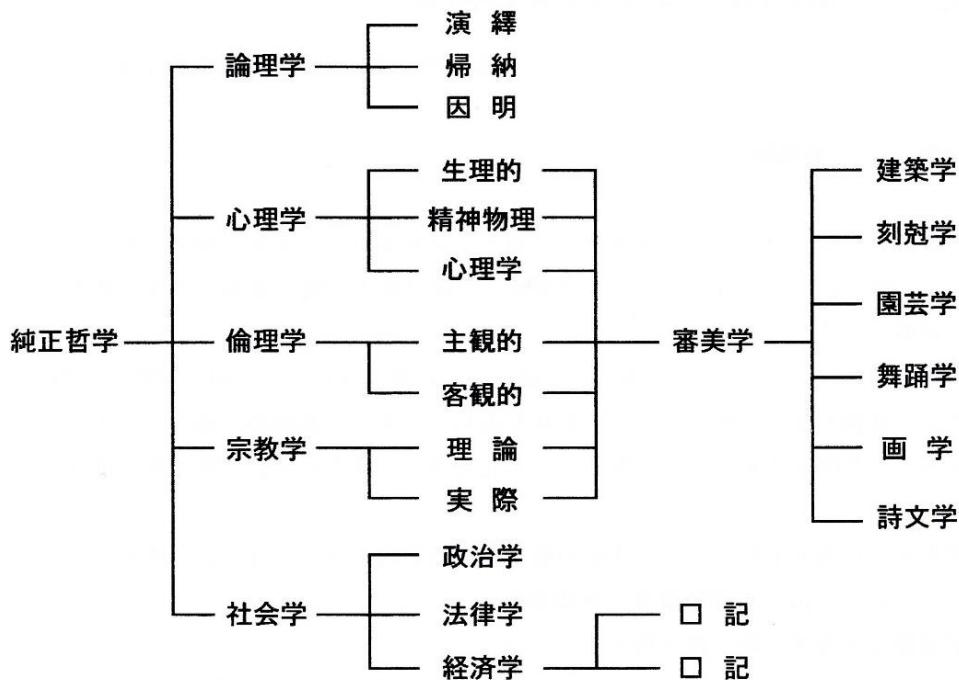
23日 本山へ香典を送る。晩、住廣屋法事行。立花、花田、哲学書院へ3本葉書を送る。

24日 この夕より法然上人御祥月。雨降る。

25日 雨降る。膳、碗を構求せらる。

29日 嶽如上人御葬儀会執行。この日より雨降り出し。

31日 本山へ為替を出す。又横屋払に付意見を述ぶ。この晩、□藏行を兄、父に談せり。



- 天子御慈恵より天下の罪人を大赦する如く、罪あり乍ら牢におり乍ら救い出さる。これ世間にまれなること。
- 弥陀の本尊も超世外に並びなし。只慈恵より三毒罪の牢状の罪人を救う。弘の罪人は罪造らず監獄を身から出さぬ。我々は出すも天子に助けらる・しょうなき、いたづらものなれば也。

【解説】「石峰」第15号に引き続き、今回は、明治24年から27年までの能海寛の『春秋日記』を掲載します。この時期は、慶應義塾を退学して、新たに哲学館へ転学するときから、哲学館を卒業して、郷里へ帰り、27年正月を淨蓮寺で迎え、チベット探検に出かける決意を固め、正月三日に、「口代」という遺書を認めた時期であり、その後、1月31日に、父と兄へ藏行を打ち明けた記述までの日記を記事にしております。

24年正月には、思想上の将来の希望を述べている。25年には、「不動」と「弥陀如来」の二尊を信奉する。「処世道心を安穏の極楽に遊ばしむるの道」、「智徳雄賛皆」この二つより出るという。又、海外で活躍した、山田長政、田中鶴吉等の伝記を読み感化をうけたようである。23年末、哲学館に転学以降に英文会の活動がおろそかになったと3月17日の記述に記している。発奮して3日目に三省堂に英文印刷を依頼するも断られて大いに落胆している。それにもめげずに、「新仏教徒」運動を推進している様子が記されている。宣教会、文学寮、内学院、大学寮、高中、尋中、南條博士、井上円了、白山、子安などの友人たちへ書簡を送り「経緯会」発足（「新仏教徒」運動）の下働きをしている様子が日記の随所で見られる。

この4年間の日記の欠落部分を補完するものとして、「東京南東紀行」、「口代」、「英文・エコノミー」、「能海寛往復書簡」、「手帳記録」、「出納記録」などがある。これらの情報を集合することによって、能海寛の行動が把握できるものである。次回は、海外編として、明治31年以降の「渡清日記」、「春秋日記」を掲載予定です。（隅田記）